
夜に舞い落ちる花の欠片

白 一梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜に舞い落ちる花の欠片

【Nコード】

N34600

【作者名】

白一梅

【あらすじ】

SS短編集。

ジャンルは様々で、好きなジャンルをチョイスして読んでいただければ幸いです。

読みきりのお話となっていますので、一作品からでもどうぞ。

*収録作品の説明

まずは、今後、ここに載せていく予定の作品説明をさせていただきます。

『言葉遊び』

ジャンル 恋愛

キーワード *平安時代

*天皇

あらすじ

平安時代、一条天皇が世を治める世の中、一条天皇の従兄弟の私は一条天皇と仲が良かった。それは、まるで・・・あたかも仲の良い兄弟のように。

私は、天皇の血を引いているのか、と疑うほどの男らしい姫であった。

ある日・・・。

一条天皇

懐仁やまひとに私は相談事をされた。

・・・その内容は 。

『流れ雲』

ジャンル 学園

キーワード *主人公俺様

*部長

*サボり魔

*高校生

あらすじ

いくら雲に手を伸ばしても、その手は雲には届かない。
届きそうでも、届かないその雲は、まるで

『星空に届け』

ジャンル 恋愛/現代

キーワード *出版社

*不良

*切ない

あらすじ

普通に仕事をして、それなりに稼げてモテる俺の元に現れたのは、厄介な女。

なぜか、俺のことを知っていて、その上、好きだとほざいてきた。

・・・この女、何者だよっ!?

俺の苦悩の物語・・・ではなくラブコメです。

『月明かり』(『星空に届け』と連結。単品でもお楽しみいただけます。)

ジャンル ほのぼの

キーワード *青春

*学生

*野球

*天然

*切ない

あらすじ

幼いころから野球少年でリトルリーグのベンチ入りしていた俺の前に現れたのは

野球超初心者、天才君。

そんな天才に、俺はすごく嫉妬していた。

・・・だが、実は天才君もいろいろと苦労している。

『闇へ堕ちて、』

ジャンル ダークファンタジー

キーワード *妖怪

* 小心者

* 25歳

* 古代中国

あらすじ

滅多に人間が足を踏み入れない妖あやかしの領域で、散歩をしていると
珍しいことに人間と遭遇した。

・・・この人間、何者だ？

『光に焦こがれ・・・』 (『闇へ堕ちて、』と連結。双方読んでいた
だいた方が楽しめます。)

ジャンル ダークファンタジー

キーワード *妖怪

- * 半妖
- * 人間
- * 古代中国
- * 多少残酷
- * 恋愛

あらすじ

別に人間に対して、特にマイナス感情のなかった俺は、気まぐれで倒れていた女の命を助けた。

それは、俺にとって幸か不幸だったのか。

『淡い思考』

ジャンル 現代

キーワード *不良

*乱闘あり

*慕われ

あらすじ

俺は不良中学生で、族に入っていた。

でも、さすがにそろそろ少年院に入る可能性のある年だし……。

俺は族抜けをすることにした。

今の予定はこの何作品です。
これからも増える予定あります。

*言葉遊び

「・・・なあ、ちよいと相談を聞いてくれぬか？」

深いため息をつく、私の従兄弟の懐仁^{やぶひと}。

振る。
別名『一条天皇』の頼みを、私が断れるわけもなく首を縦に

振る。
「何でしょうか」

努めておしとやかにきいてみれば・・・。

「おい、何を猫を被っておるのだ」

しかめっ面で懐仁にそう言われ、私は思わず噴出しそうになるのを堪え、言葉を紡ぐ。

「別に猫など被っておりませぬ。これが一般の主上との接し方でございますゆえ。それに、一条天皇は元服^{げんぷく}なされて成人となられた身。小童ではございませんので、もう以前のように接するのは控えようという所在です」

できる限り自分に使える堅苦しい言葉をずらずら並べると、懐仁はあきれてため息をつく。

「・・・今更すぎぬか？」

懐仁の言葉に、私は先ほどまでの緊張を和らげて、声をあげて笑っ

た。

「そうだな。」

すっかりいつもの口調、態度になって、私は正座を胡坐あぐらへと座り直す。

「ああー、足が痺れる！ 正座って、なんであんだよ。 胡坐のが絶対いいね！」

「・・・言葉遣いが相変わらず悪いの、お主は。 まあ、いい。 それよりも・・・」

懐仁が、ふと、真面目な顔をしたので私も少し体を傾け、真面目に話を聞く体制をして懐仁の次の言葉を待つ。

「余に好きな女子おめいができた。」

「・・・」

想像していたのと全く違った言葉が、懐仁の口から出てくる。

「ってか、それがどうしたというのだ！？ なぜ私に相談する！！？」

「・・・あ、そっスカ」

引きつった顔で、とりあえず返事をする。

「そつだ。 それで、だ。 お主もとりあえずは一応は、端くれといえども女子であろう？ だから、何を送ればよいのかと思つてな」

「……あんさ、懐仁。その言い様は私に対して酷くないか？」

「いや、妥当だと思っぞ」

「……あ、そ」

「それで、贈り物は何がよいと思うっ？」

「飯っ！」

バコッ

派手な音を立てて、懐仁の投げた巻物が私の頭に直撃する。

「~~~~~っつ。　　いつてえーっ！　何すんだっ、懐仁っ！！」

思いつきり懐仁をにらみつければ、懐仁は、これ見よがしにがっくりと項垂れてみせる。

「お主に相談した余がばかであったな。　お主に女心などないことを忘れておった」

「……なんだと。」

懐仁の言葉に、私はイラッとして、ゆらゆらと立ち上がる。

「おいっ、懐仁！　その女の名前を言えっ。　ぜってー、両思いにさせてやる……！」

ビシツと人差し指を懐仁に向けて、堂々と言い放つ。

「そうか、絶対、だな？」

「ああ、絶対、だっ」

「……単細胞め」

クツクツ、と懐仁が笑って言うのをみて、私はカッとなった。

多分、懐仁を殴ろうとも思ったのだろう、勢いよくグングンと懐仁に近づいていく。

と……。

「おい、くれてやる」

よく分からないが、高級菓子を渡された。

「……は？」

胡乱げに懐仁をみれば、そこには楽しそうな顔。

「お主が好きだ。正室に來い」

……私の人生終わりました。

*流れ雲

「かつたりいー」

学校の屋上の日陰に寝転んでいる一人の学生が呟く。

学ランを着崩していて、中には赤のＴシャツを着ている。

髪は明るい茶毛であり、目を瞑っていてもその容姿が端麗であることが分かる。

肌は透き通るように白く、中性的な顔立ちをしていた。

体格はスラックとした長身。だが、決して華奢という印象を抱かせない。

夏休み明けの9月上旬。

蒸し暑さの残る中、肌をなでるようなぬるい風が吹いた。

汗でべっとりとした髪を、彼は鬱陶しそうにかきあげる。

眠そうに開かれた目は、明るい色の瞳だった。

明るい茶毛に、明るい色素をした瞳。

明るい印象を彼に対して抱かせてしまいがそれはほんの一瞬のこと。

彼の瞳に宿る闇が、彼の印象をも冷たくしていた。

青い空に、浮かぶ雲。

彼は、雲に向かって片手を伸ばす。

届きそうだけど、届かない。

手を伸ばせば伸ばすほどに、現実を突きつけられる。

この手をいくら伸ばそうとも、あの雲には届くことはないということ。
とを。

あの雲は、遥か遠くにあるんだということ。。。。

だから、俺にできることは、あまりにも遠い存在の雲を見守ること
だけ。

だが、雲はゆっくりと確実に……、流れてゆく。

いくら追いかけても追いつくわけなどなく……

俺には雲を見守ることさえ許されない。

彼は雲に向かって伸ばしていた手を下ろす。

その手を自分の胸へと引き寄せ、ぎゅっと握り締める。

まるで、痛みを耐えるかのように。

「。」「。

彼が小さく呟く声は、4限終了を告げるチャイムに音にかき消される。

彼は、チャイムが鳴り終えて、しばらく。

ゆっくりと、気だるげそうに上体を起こした。

学校の購買で、昼食にパンと飲み物を買って、屋上で食べようと歩き出せば、背後から声がかげられた。

「おっ、部長じゃん！ また授業サボってたよなー、お前」

「・・・何か用？」

声をかけてきた相手を振り返ることもせず、声だけで問う。

その間も足を止めることはなく、歩き続けた。

声の主は、同じ部長の副部長。そして、幼馴染。

俺をからかっているつもりか何なのか、たまに俺のことを部長と呼ぶ。

間違っではないのだが……。

「何か用？』じゃねーだろつ。 また授業サボりやがって、とばつちりが俺にきたんだぜ!？」

「あつそ。 ご愁傷様。 俺には関係ないから」

俺が足を止めずに歩き進んでいたせいか、そいつは走って俺の前に立ち塞ぐ。

「で、用はそれだけ？」

俺よりいくらかくらい色をした茶髪に、こげ茶の瞳。

顔は童顔でとてもではにが、高校生には見えない。

ふんわりとした髪型は、そいつによく似合っていて、いかにも「軽いですっ」という感じだった。

そいつが、俺に向かって人差し指を突きつける。

「今日は部活に出るよ!」

「……ああ」

俺が頷くのをみて、そいつはパツと顔を輝かせた。

が、俺の次の言葉を聞いて肩を落とす。

「今日は部活があったのか。 休むからよろしく、 副部長」

俺は副部長の肩を、 ポンと叩いて横を通り抜けていく。

しばらく呆然としていた副部長は、 ハツとして俺に声をかける。

「部長なんだから、 しっかりこいよっ」

「そんなの知らん。 部活に出るも出ないも俺の勝手だ」

「おいっ、 もう一ヶ月も休んでんじゃ・・・」

そいつがさらに言い募ろうとしたので、 俺は軽くそいつに振り向き一言告げる。

「俺に文句でも？」

いつもよりも低めの声を発し、 にらみつけければそいつは黙りこくった。

ので、 俺もさっさと飯を食おうと屋上へと向かった。

なんでこんなにも、あいつは変わってしまったんだろう。

高1までは多少クールな、でも、やさしくていいやつだった。

だが、いつの日だろうか、あいつの瞳が影を翳すようになった。

誰にも自ら近づきはせず、人を近寄せもしない。

授業や部活さえろくに出なくなった。

俺だけじゃなく、みんなが心配した。

あまりにも突然の変化に、俺達は何もすることはできなかった。

どんな言葉をかければいいのか分からなかった。

そんな中、あいつに思い切って声をかけたやつがいた。

大丈夫？ と。

あいつは、それを聞いて鼻で笑った。

そして、声をかけたやつを冷たく一瞥して去っていった。

『大丈夫？ 何を偽善者ぶってやがる』

俺の耳には、あいつの音にしなかった言葉が聞こえてきた気がした。
それ以来、あいつに近づくものはいなくなった。

俺は小学校からの付き合いだから、いまだに声をかけているわけ。
。。。

『あのね、あのこと根気強く仲良くしてあげて。』

お願い。 あのことを一人にしないであげて』

突然、頭の中にあいつの母親の音が響いた。

ごめん、おばさん。

俺には無理みたいだよ。

俺じゃ、あいつに近づくことさえできないよ。。。。

疲れ果てた乾いた笑みを浮かべ、俺は立ち去っていくあいつの背を見送った。

屋上で昼食を食べ終えた彼は、フェンスに背中をあずけて空を見上げる。

「空」

小さく呟く声の告げた名前は、彼の弟の名。

今は亡き弟の名。

彼がこの世で、もっとも大切としていた人。

彼が唯一、家族として信頼した人。

命を賭けて守ると誓った人。

いつからだろうか。

雲を見ては、彼が弟の名を呟くようになったのは。

暗闇の中、彼は空に向かって……。

雲に向かって、がむしゃらに手を伸ばした。

雲のように遠い存在で、雲のように自由。

唯一、心をあずけた存在は雲のよう。

遠い存在で、触れることなどできず。

いつのまにか、見守ることさえ叶わなくなってしまった。

「空」

小さく呟く声は、青い空へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3460o/>

夜に舞い落ちる花の欠片

2010年11月14日02時33分発行